おかげさまで日之影新聞 第9号

柚子と茶の絶景斜面

細い山道の向こうに広がっていた風景

日之影を旅するといつも、車はやたらと細い山道を走るのが常だった。どこかの集落へ向かうにも、キャンプ場へ行くにも、目的地がどこであれ「こんな細い道の先に本当に〈それ〉があるのか？」と疑心暗鬼になりつつ、1台の車がやっと通れるくらいの、「向こうから車が来たらどうすんだ？」と不安になるくらいの幅しかない、うねうねとした道をビビりながら走る。そのたびに「またか！」と言いながら、どんどんと細くなる道の先へ先へと突き進むのだ。けれど今回はその先に待っていた風景がいつもとはまるで違っていた。そこで待っていたのは、ぽっかーん！と突き抜けて広がる景色だった。山一面にひらかれた畑。あるときは柚子畑、またあるときは茶畑だった。ふたつの畑は全く別のところに存在していたが、ぽっかーんと広がる山の斜面の畑であることはおなじだった。嗚呼、なんという気持ちよさだろう。なんという開放感だろう。思わずため息がこぼれる。未だかつて見たことのない、美しい山の畑の姿に感動してしまう。どうしてこんな山奥にこんな風景が広がっているのだろう。どうして山がこんな風景になりうるのだろう。

というわけで、今回の日之影新聞、主人公は「山の斜面」です。

燦々と降り注ぐ陽射し めいっぱい浴びて

黄色い実が成っている工藤さんの畑の秋。山の斜面の勾配があるなかでの作業。

見立地区仲村という集落の山の斜面に広がる工藤さんの柚子畑には、400本近い柚子の木が実をつけていた。黄色い実が風景をかわいらしく彩る。畑を歩くと靴底に土の柔らかさを感じる。丁寧に刈られた草が肥料となり土を柔らかくしているのだ。山の斜面での草刈りは重労働だが、75歳の工藤さんは年に何度もこまめに草を刈る。畑が荒れれば収穫作業も困難になるからだ。「畑の管理は本当に大変」と工藤さんは優しく笑う。若木をシカに荒らされないようにつくった柵、まっすぐに伸びる習性のある柚子の枝を横へ広げてやる工夫、豊かに実った柚子、綺麗に整頓された作業場。至るところに工藤さんの丁寧な仕事ぶりの痕跡が残されていた。この山の斜面の柚子たちには陽が燦々と注ぐのだそうだ。美しきこの風景は、ここで40年間柚子を育ててきた工藤さんの仕事の見事な成果なのだ。

また、七折地区には、一心園さんの茶畑が山の斜面を覆い尽くしている風景があった。一面深緑の絶景。茶葉が綺麗に列をなし、まるで幾何学模様のようだ。かつて甲斐一心さんは、田んぼや牛などを生業とする農家だったが、「直接消費者に販売できるものをつくりたい」と考えるようになり、お茶に目をつけた。雑木山を切り拓こうとしたが、重機は入らないので木を伐るのも根を掘り起こすのも人の手でやり遂げた。そしてそこを畑として茶を植え、やがてお茶の専業農家となるに至ったそうだ。茶畑を歩いてみると急な勾配だとわかる。今は息子の鉄也さんが仕事を受け継いでいる。ここで育てる一心園のお茶は化学肥料を使わず、もみ殻や干草などでつくった自家製堆肥を使用し、無農薬で育て、有機JAS認定を受けている。春には一番茶、夏には二番茶、そして秋冬番茶が収穫される。美しきこの風景は、ここで30年以上もお茶を育ててきた甲斐さんの熱意の成果なのだ。

インフォメーション

「柚子農家・工藤晃一郎さん」

日之影町見立地区仲村集落の農家。柚子づくり歴40年余り。標高400mの山の斜面に広がる畑で400本ほどの柚子の木を栽培。寒暖差の大きな環境のなかで香り高い柚子を育てている。癒しの森の案内人でもある。優しい笑顔と穏やかな語り口が最高に魅力的。

所在地　宮崎県西臼杵郡日之影町大字見立2438

上：収穫された柚子たち。酸味よし、香りよし。／中左：柚子の枝には鋭く強靭なトゲがある。／中右：丁寧に剪定された枝が木の根元を覆う。下：工藤さんが手にしているのは特大サイズの鬼柚子。「面白いでしょ？」と。

山の斜面こそまちの歴史と財産

そう、日之影は、山の斜面のまち。人は山の斜面に家を建て、寄り添い暮らしてきた。道は山の斜面に生まれ繋がっていった。恵みは山の斜面に実を結んできた。工藤さんの柚子畑も、甲斐さんの茶畑も、この日之影にしかない唯一無二の風景だ。それぞれが何十年にも渡る山の畑仕事から生み出された風景だ。山の斜面に注ぐ太陽の陽射し。山の斜面に生じる気温の寒暖差。山の斜面を流れる清冽な川の水。自然条件を活かし、斜面をひらいて畑とし、斜面で働き収穫してきたことが、そのまま風景として表現されている。一朝一夕にはできない、どこの誰にも真似されることのない、歴史と知恵が刻まれたこれら山の斜面こそ、日之影の素晴らしさではないだろうか。

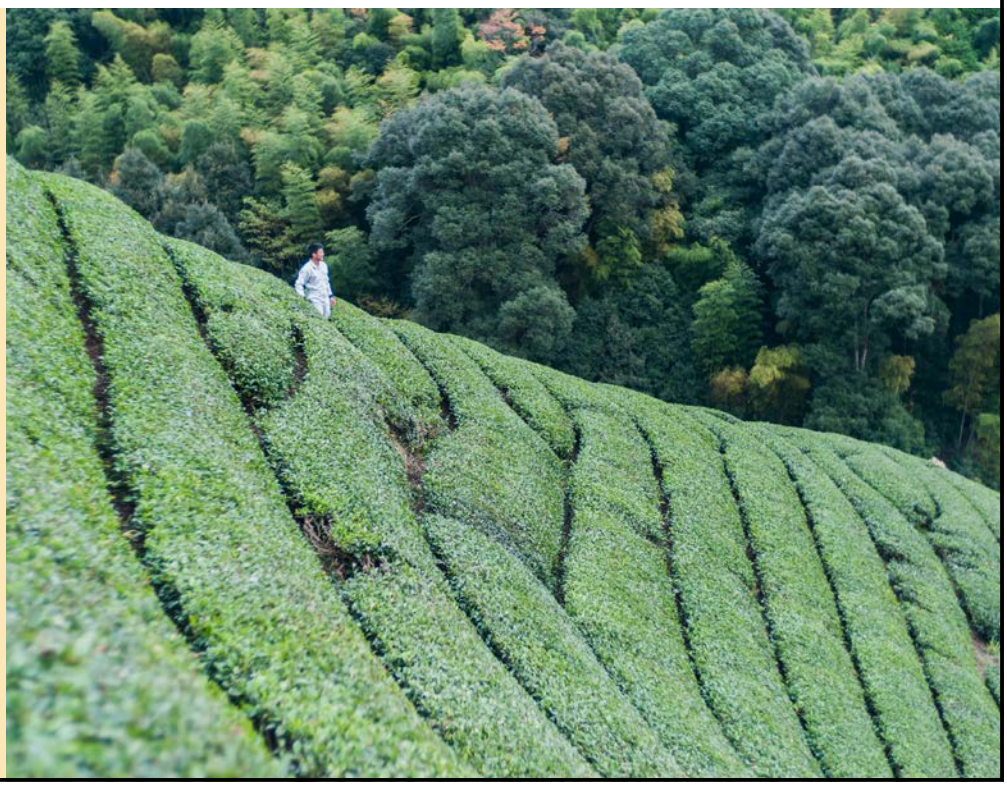
甲斐さんの茶畑は息子である鉄也さんが継ぎ、これからまた新たな歴史を刻んでいくことだろう。柚子畑の工藤さんには後継者がいない。工藤さんが愛情を注いで来たこの柚子畑の風景はこのまちの宝だ。遠くない未来、いい後継者が現れることを心から祈りたい。

美しき山の斜面の風景。それを生んでいるのはここに暮らす人の手だった。人の手が、山の風景を変えたのだ。なんと素晴らしいことだろう。どうかこの美しき山の斜面の風景を、あなたにもいつかきっと見てもらいたいと願うばかりだ。

上左：一心園をつくった甲斐一心さんは今も笑顔で仕事中。／上中：「釜炒り茶」というのは一般的にはとても珍しい製法だ。／上右：香り立つ上質な茶葉。／下：息子の鉄也さん。茶畑にまく有機肥料について教えてくれた。

一心園のお茶（左から）

強火仕上げの釜炒り茶	350 円
特選 月の雫	1,080 円
日之影紅茶	432 円
烏龍茶	各 540 円



インフォメーション 「一心園」

お茶の製造販売を行う一心園の畑では、農薬・化学肥料は一切使用せず、有機JASの認定を受けている。お茶は日本古来の製法である「釜炒り茶」で、香りよく香ばしさがあるのが特徴。その他、茎ほうじ茶、釜炒り抹茶、紅茶、玄米茶も販売している。（全国どこでも発送可）

所在地　宮崎県西臼杵郡日之影町大字七折９３２３
電　話　０９８２－８７－２６４３
ＦＡＸ　０９８２－８７－２６４８
www.issin-en.com

使える かなこの 日之影方言教室

「むかご取り」

「むかご」って知っちょるけ?ま～、たいがいなもんは知っちょるじゃろけんどんね～。「むかご」っちゃ「つる」にでけるとよ。そん「つる」についちょるハート形の葉が10月末かり11月にかけち、黄んのう色づくとよ。そん葉の根とに、小んめ～丸い～実がいっぺごつなっちょるわ～。そん「つる」の根とん先を掘っていくと、山芋がでけちょるとよ。まあ～、「むかご」は山芋の子供みてぇなもんじゃね～どかい!

うちん子が、小めぇ時には、秋ぐちになると兄弟でひんびんごつ山に傘を持っち行くとよ。傘を裏返しに開けち「つる」を棒で叩いち、傘に落ちた「むかご」を集めるとよ。じゃもんじゃき、うちん家ん傘は骨が折れっちょってよ～、使いもんにはならんごつしなかしよったがね～。こん前、長男が居んで来たかと思ったら、山に「むかご」取りに行っちょったふうじゃが。鍋ひとつ「むかご」が取っちあったが～。久ぶりに居んできて山に行くとじゃき、よっぽど好きとばいね～。

うちへんが小めぇ時は、「むかご」をアルミホイルでくるじ、風呂の焚き口の「おきり」の中に入っこんで焼きよった。うちん子の小めぇ時は、「むかご」をアルミホイルでくるじ、フライパンで蒸し焼きにしち食わせよった。今は「むかご」を皿に入れちラップしてレンジで「チン」ばい!まぁ～便利になったよ。時代じゃね～。

〈訳〉

「むかご」ってご存知ですか?大体の方は知ってますよね。「むかご」は「つる」に生っているのですよ。その「つる」に付いているハート形の葉が、10月末から11月にかけて、黄色く色付きます。その葉の付け根に小さくて丸い実が沢山生ります。その「つる」の根の先を掘っていくと、自然薯ができています。「むかご」は自然薯の子どもみたいなものでしょうかね。

私の子どもが小さい頃は、秋になると兄弟で、毎日のように山に傘を持って行きました。傘を逆さに開いて「つる」を棒で叩いて、傘に落ちた「むかご」を収穫するのです。ですので、私の家の傘は骨が折れ、使えなくなってました。先日、長男が帰省したと思ったら、山に「むかご」を取りに行ったようです。鍋いっぱいの「むかご」が収穫してありました。久々に帰省して「むかご」を取りに行くのですから、本当に好きなのでしょうね。

私達が小さい頃は「むかご」をアルミホイルで包み風呂の焚き口の、残り火の中に入れて焼いていました。私の子どもが小さい頃は「むかご」をアルミホイルで包み、フライパンで蒸し焼きにして食べさせていました。今は「むかご」を皿に入れ、ラップをしてレンジで「チン」です。便利になりましたね。時の移り変わりですかね～。

活動報告 地域おこし協力隊が行く!

地域おこし協力隊の辻慎一郎です。私は、2018年の4月に日之影町へ赴任しました。普段は林業に従事しています。着任してすぐに林業の繋がりで「日之影町林業研究グループ」に加入しました。林業研究グループは様々な活動をしており、その活動の一環に『木育』があります。

木育とは、木や自然を題材にして子どもたちの心を豊かにするという活動です。林業研究グループでは、昨年の秋に八戸小学校「緑の少年団」を対象に木育を実施しました。画像は、そのひとコマです(自身で勝手にドレスコードを設定し、"緑" のマルチカバーを首に装着しています)。

当日は、私が提案し、林業研究グループの谷川会長が採用してくださった「バードコール作り」を行い、私は子どもたちの作製をサポートしました。作製する子どもたちの活き活きとした顔を見て嬉しい気持ちになり、調子に乗って子どもたちが作製している横で市販のバードコールを使ってキレイな音色を奏でてしまいました。そうすると、子ども達から「何それ、ズルイ!」と言われ……そう、大人はズルイのです。

次の木育では、杉を材料にしたストラップ作りを提案しようと考えています。子ども達、楽しみに待っていて!

今月のおかげさま

おかげさまで、すくすく成長中。

日之影でエスニック雑貨とカフェのお店をしています。お店のオープンと同時期に妊娠が分かり、それから出産を経て、1年半が経ちました。今では「まはるくん」に会いに来るお客さんがいるほどの看板息子です!お客様に支えられて、お店もまはるくんもすくすく成長しています。

ひかり(34さい)・まはる(1さい)

おかげさまで、日之影。

日之影取材日記

「2018年11月8日ゆず畑にて」

おかげさまで、この新聞が町民の皆さんの目に留まる機会が多くなったようで、「これおもしりーがね!あんたが作っちょると?」とよく訪ねられるようになりました。「はい、そうです!」と応えたいところですが、残念ながら私ではありません。東京を拠点にする「雛形編集部」の編集者と、山形のデザイン事務所「akaoni」のデザイナー&カメラマン、コピーライター2名が取材を行い、編集して新聞を作ってくださっています。写真は工藤さんのゆず畑にて取材中。かっこいいポーズで写真を撮るデザイナー&カメラマン、小板橋さん。鬼ゆずを両手で大事そうに抱えながらインタビューするライター、空豆さん。いただいたゆずを落として下の斜面にコロコロ転がしちゃう編集者、菅原さん(フレームアウト)。この3名が日之影新聞を作ってくださっています。日之影町役場・地域振興課　佐藤将仁

発行：日之影町〒882-0402 宮崎県西臼杵郡日之影町大字岩井川3398番地1／☎0982-87-3900(代表)／企画：株式会社オズマピーアール／編集：菅原良美(雛形編集部)／アートディレクション&写真：小板橋基希(akaoni)／デザイン：難波知子(akaoni)／取材・文：空豆みきお(akaoni)／禁・無断転載 ©hinagata. All Rights Reserved.